

幼稚園の5歳児クラスにおける環境構成と保育者の援助のあり方

－幼小のカリキュラム接続に着目して－

横山真貴子

(奈良教育大学 学校教育講座 (保育内容))

木村公美・竹内範子

(奈良教育大学 附属幼稚園)

堀越紀香

(奈良教育大学 学校教育講座 (幼年教育))

The Formation of Environment and Kindergarten Teacher's Support for 5-year-old children's class

Makiko YOKOYAMA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Kumi KIMURA・Noriko TAKAUCHI

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

Norika HORIKOSHI

(Department of School Education, Nara University of Education)

要旨：幼児期の教育と小学校教育の接続の概観から、両者を円滑につなぐためには「学びに向かう力」の育成を目標とし、幼児期を十分に生ききる「アプローチカリキュラム」の作成が重要だと捉えた。そのための第一歩として、本研究では、幼稚園5歳児の「教育課程」と「指導計画」（教育活動）を対象に、「学びに向かう力」の育成がどのように目指されているかを検討した。その結果、指導計画には既に「学びに向かう力」が埋め込まれていること、しかし今後の課題として（1）5歳児の育ちは3、4歳児の育ちの上に成立していることを認識した上で、（2）子ども自らが「遊び・活動・場」をつくる援助を行うために、（3）場と時間を保障する援助が重要となってくることが示された。

キーワード： 幼児期の教育と小学校教育の接続 preschool-elementary school transition, 環境構成 formation of environment, 援助 support, 5歳児 5-year-old children

1. 今、求められる幼児期の教育と小学校教育の接続

近年、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続が強く求められている。本研究では、接続が求められるようになった背景と経緯をたどりながら、どのような接続が求められているのか、明らかにすることを目的とする。さらに、その結果を踏まえて、実際の保育実践においては、接続に向けてどのような活動が可能なのか、教育課程・指導計画を分析し、環境構成と保育者の援助の観点から検討していく。

1.1. 接続が求められる背景

幼児期と小学校の教育の接続が求められる背景には、主に「移行時の不適応問題の発生」と「体系的な指導への要請」がある（酒井，2012）。

1.1.1. 移行時の不適応問題の発生

幼児期と小学校の教育への移行時の不適応問題とは、いわゆる「小1プロブレム」と呼ばれる、授業中

の立ち歩きなど、小学校の学習や生活に適応できないために生じる問題行動の多発や授業の不成立を指す。この現象は、平成11年頃からマスコミの報道により社会的な注目を集めるようになった（藤井，2010）。当初はその主な原因を、平成元年の「幼稚園教育要領」の改定以来の幼児教育の実践、「自由保育」に求める風潮も強かった（上野，2007）。

しかし「小1プロブレム」の名づけ親とも目される新保（2001）は、「小1プロブレム」は「高学年の『学級崩壊』とは異なり、幼児期を十分、生ききれてこなかった、幼児期を引きずっている子どもたちが引き起こす問題」（p.14）と指摘した。そして、その背景にある問題として、（1）子どもたちを取り巻く社会の変化、（2）親の子育ての変化と孤立化、（3）変わってきた就学前教育と変わらない学校教育の段差の拡大、（4）自己完結して連携のない就学前教育と学校教育の4点を挙げた。「小1プロブレム」はこうした複合

的な要因から生じ、その克服のためには、やはり複合的な取り組みが不可欠だと捉えたのである。

その後、大きくは「小1プロブレム」対策から幼小連携の構築へと課題が移っていく（藤井, 2010）。幼児期の教育のみをやり玉に挙げるのではなく、幼児期と小学校の教育の段差を円滑に接続することが強調されるようになったのである。

1.1.2. 体系的な指導への要請

一連の教育関係の法律の改正・改訂においても、幼児期の教育と小学校教育との連続性・一貫性が重視されるようになる。世界的にも幼児教育の重要性が謳われるようになり、わが国でも平成18年の「教育基本法」の改正で「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」（第11条）と規定された。翌19年の「学校教育法」の改正では、学校種の最初に幼稚園が規定され、小学校以降の教育の基礎を培うものとして、幼稚園の役割が明確化された。と同時に、子どもの心身の発達に応じて体系的な教育を組織的に行うことが目指された。これらを受けて平成20年に改訂された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」、及び「小学校学習指導要領」では、保幼小の連携・接続が明文化され、「子ども同士の交流」「保育者と教員の交流」など具体的な連携の実施が求められた。

さらに平成22年11月には、文部科学省は「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議、以下「幼小接続の在り方」と略す）を出し、①幼児期の教育と小学校教育の関係を「連続性・一貫性」で捉える考え方、②幼児期と児童期の教育活動をつなぐ工夫、③幼小接続の取り組みを進めるための方策（連携・接続の体制づくり等）の3点を示した。今や、幼児期の教育と小学校教育の接続は、その必要性、重要性を謳うだけでなく、その具現化が求められる時期に入ったといえる。

1.2. 何をつなぐのか？

では「幼児期の教育と小学校教育の接続」とは、何をつなぐのであろうか。無藤（2009）は「子ども同士の交流」「教師同士の交流」「カリキュラムの接続」の3点を挙げている。しかし、そもそもつなぐべき両者の間にある段差とは何なのか。Table 1に、横井（2010）をもとに、両者の違いをまとめた。

1.2.1. 教育のねらい・目標

わが国の教育の目的は「教育基本法」第1条にあるように「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身とともに健康な国民の育成」である。その実現のために第2条では、5つの目標（教育の基本事項、自分自身、社会とのかかわり、自然との共生、国際社会とのかかわ

Table 1 幼児期の教育と小学校教育の違い

	幼児期の教育	小学校教育	
教育のねらい・目標	「生きる力の基礎」としての「心情、意欲、態度」を身につける。	「生きる力をはぐくむ」。「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うこと」	
指導方法	(1) 中心	「生活全体」が学びの場・「遊び」が指導の中心。	「授業」が学習活動の骨格。
	(2) 指導計画	保育課程・教育課程や指導計画は作成するが、子どもの活動を規定するものではない。「幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう」、「幼児の活動に沿った柔軟な指導」が求められる。 生活全体が指導案の対象であり、「生活の自然な流れ」、子どもの「意識や興味の連続性」を重視するため、指導案の時間の区切りは、小学校に比べおおまか。	「各教科の各学年の指導内容」は、小学校学習指導要領において詳細に定められおり、具体的な指導計画を作成する。 「系統的・発展的な指導」、「効果的・段階的な指導」を目指す。
	(3) 領域と教科	「領域」（総合的に子どもの経験を捉える際の1つの視点、「窓」のようなもの）。	「教科」（それぞれが独立した授業として展開される）。
	(4) 評価	保育者の自己評価が中心、子どもを評価するという視点は弱い。	「指導基準」（子どもの姿・何を身につけさせたいかの評価の指標） 「指導と評価の一体化」（評価を教師自らの指導の改善につなぐ） 子どもたち自身の学習内容の振り返り。
	(5) 「一人一人」と「集団」	「一人一人を生かした集団」（集団に先立ち、一人ひとりの子どもを尊重する）。	「望ましい集団生活」のために、「集団の一員」として子どもが位置づけられる。 「授業」を通して「集団」で同じ内容を学ぶという形態のなかで、一人ひとりの子どもを見る。
環境	(1) 環境構成	「環境を通した教育」が基本。	（学習指導要領には、言語環境以外は「環境」の言葉なし）
	(2) 時間	おおまかでゆるやか（「一人ひとりの子どもの生活リズムや発達過程」を重視）。	細かく、はっきりと区切られる。決められた時間にチャイムが鳴る。 授業は45分が基準であり、間に10分や20分の休み時間が入る。
	(3) 空間	保育所・幼稚園の空間すべてが「環境」。	教室環境、個人の机と椅子など、ある一定の場所が個人的な学習活動の場となる。

（横井, 2010, pp.29-43 をもとに作成。）

りに関すること）を掲げている。これら目標の達成によって目的の実現を目指す点は、幼児期、児童期いずれの教育も共通している。またTable 1に示した通り（下線部参照）、「幼稚園教育要領」「学習指導要領」の理念の根本には共に「生きる力」がある。

1.2.2. 教育方法をつなぐ

このように、幼児期の教育と小学校教育は、目的や目標の点では連続性・一貫性をもつ。しかし、具体的な教育方法には、Table 1に示したように、それぞれの独自性がある（酒井, 2012）。

こうした指導方法や環境の違いは、子どもにとって大きな段差となる。この段差をゆるやかにするための方策として、無藤（2011）は、第1に「子ども同士の

交流」を挙げている。幼児にとって少し年長の小学生との交流は、憧れや「自分たちでやりたい」という刺激となる。小学校への期待もふくらむ。一方、小学生にとっても、自分よりも年少の子どもに出会い、自分の力や成長を確認できる機会となる。双方にとってメリットのある互恵的な活動となるのである。

こういった「子ども同士の交流」を行うためには「保育者と教師の交流」が不可欠となる。双方が互いの保育・教育について理解を深め、計画的に活動を組み込み、継続的に実現させていく努力が必要となる。

1. 2. 3. 教育内容をつなぐ

教育内容においても、両者には大きな違いがある。小学校の教育課程（カリキュラム）は、めあてやねらいが先にあり、目的的に編成された活動のまとまりと考える。一方、幼児期の教育では、園での生活や遊びを通じて総合的にねらいが達成されていくものと捉える（酒井，2012）。

幼児期の教育と小学校教育の接続のためには、こうした違いをもつ両者のカリキュラムに、つながりをつけていくことも必要である。すなわち、接続カリキュラム（幼児期の教育における「アプローチカリキュラム」、小学校における「スタートカリキュラム」）の開発である。しかし、ここでつなぐのは、具体的・直接的な教育内容（文字の読み書き・計算など）ではない。小学校での学習活動を進める上で基盤となる「学びの芽生え」をつないでいくのである（無藤，2011）。

1. 2. 4. 学びの芽生えをはぐくむ

では「学びの芽生え」とは何なのか。先述の「幼小接続の在り方」（2010）では、「学ぶということを意識しているわけではないが、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、さまざまなことを学んでいくこと」（p.10）とし、「幼児期における遊びの中での学び」がこれに当たるとする。一方「小学校における各教科等の授業を通じた学習」は、「学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休憩の時間等）の区別がつき、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めること」ができる「自覚的な学び」（p.10）だとする。

それゆえ、幼児期から児童期にかけては、両者の調和のとれた教育が求められる。例えば、幼児期には「調べる、比べる、尋ねる、協同するなどの様々な手法を組み合わせて楽しみながら課題を見だし解決する取組」（p.11）を通して、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識につなぎ、小学校では「楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切にし、学ぶ意欲を育てる」（p.11）ことが求められる。

1. 3. 学びの基礎力の育成

1. 3. 1. 幼小接続の3段階構造

「幼小接続の在り方」（2010）では、幼児期の教育と

小学校教育の接続を「教育の目的・目標」→「教育課程」→「教育活動」で展開する3段階構造で、体系的に捉えようとしている。

具体的な実践の中では、それぞれの「教育活動」において、先述の「学びの芽生え」から「自覚的な学び」への円滑な移行が求められる。しかし、まずは、幼児期と小学校の教育に共通の「目標」を描き出すことが必要である。「幼小接続の在り方」（2010）では「学びの基礎力の育成」を「目標」としている。

1. 3. 2. 学びの基礎力

「学びの基礎力」とは、学びの自立、生活上の自立、精神的な自立の「三つの自立」を指す（Table 2 参照）。

Table 2 三つの自立

学びの自立	自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる活動を自ら進んで行うとともに、人の話などをよく聞いて、それを参考にして自分の考えを深め、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現すること。
生活上の自立	生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわり、自らよりより生活を創り出していくこと。
精神的な自立	自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくこと。

（「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」，2010，p.15をもとに作成。）

幼児期の終わりには、その時期にふさわしい「三つの自立」を養うことを目指し、児童期（低学年）には、その時期にふさわしい「三つの自立」を養いつつ、さらに「学力の三つの要素」を培うことが求められる。「学力の三つの要素」とは、生涯にわたる学習基盤であり、「基礎的な知識・技能」、「課題解決のために必要な思考力、表現力等」、「主体的に取り組む態度」を指す。それぞれの発達の段階を踏まえた教育の充実が求められている。

1. 3. 3. 就学能力

子どもが獲得すべき能力の明確化、すなわち「就学能力」の形成の観点から、幼児期と小学校の教育の接続を検討しようとする試み（上野，2007）もある。「就学能力」とは「幼児教育において形成・獲得されると同時に、小学校低学年においても獲得・再形成される能力」（上野，2007，p.116）とされる。

上野（2007）は「就学能力」の指標として、「学齢成熟（Shulreife）」理論から「就学能力」概念への移行の歴史を追う過程で、G. ヴイツラック（1972）の12の指標を挙げている。「学びの基礎力」に比べ、より詳細な指標となっているが、「身体的発達」「学習態度・学習能力」「性格的・社会的行動習慣」「知的達成能力」の4つの観点に括られる。これらは歴史的にも、一般的に取り上げられてきた指標であり、「学びの基礎力」に通じるものもある。また幼児期に形成しつつ、同時に小学校低学年の教育で子どもに獲得させることをめざす点は「学びの基礎力」と共通している。

上野（2007）は、これらの力は「遊びや総合的活動の中で発揮され、形成される」とし、「個々の能力や

機能の訓練ではなく、形成されるべき能力が含まれた活動を展開する」(p.118)ことを強調している。そして「教育課程」は、こうした活動を実現するものだとしている。

1.3.4. 幼児期に必要な学習準備

小学校の学習準備として幼児期に育むべき必要な力を、母親の意識から探ったのが、ベネッセ次世代研究所(2012)の調査である。3歳から小学校1年生までの子どもをもつ母親5,000人超を対象にアンケート調査を実施し、家庭における子どもの学びの育ち、親のかかわり、学びの形成に必要なことを探っている。その際、小学校以降の学習の基盤として、「生活習慣」「学びに向かう力」「文字・数・思考」の3つを幼児期に必要な学習準備として挙げている(Table 3参照)。

Table 3 幼児期に必要な学習準備の3つの軸

生活習慣	トイレ、食事、あいさつ、片付けなど、生活していくために必要な習慣
学びに向かう力	自分の気持ちを言う、相手の意見を聞く、物事に挑戦するなど、自己主張・自己統制・協調性・好奇心に関係する力
文字・数・思考	文字や数の読み書き、順序の理解など、幼児期から小学校段階での学習に関係する力

(ベネッセ次世代研究所(2012)をもとに作成。)

アンケートの分析の結果、「文字・数・思考」は加齢と共に伸び、年長5歳児の2月頃には9割前後の子どもに必要な力がついてきた。一方で、「生活習慣」の「片付け」や「好き嫌いをなく食べる力」、「学びに向かう力」である「あきらめずに挑戦する力」、「人の話を終わりまで聞く力」がつかっている子どもは7割前後と個人差が大きかった。これらの結果より、幼児期に育む力として、「生活習慣」や「学びに向かう力」の重要性が強く指摘されている。

1.4. 今、求められる接続とは？

このように「幼児期の教育と小学校教育の接続」では、「子ども同士」、及び「保育者と教師の交流」を基盤に、就学に向けて、さらにはその後の学びの基盤として「子どもに育みたい力」を共通の「目標」として掲げ、その目標を実現すべく「教育内容(教育課程)」をつないでいくことが求められている。そしてさらに、具体的な「教育活動」を展開することによって、幼児期の教育と小学校教育の「教育方法」をつなぐことが必要とされる。

1.5. 本研究の目的

新保(2001)は、「小1プロブレム」は幼児期を十分、生ききれてこなかった子どもたちが引き起こした問題だと指摘した。それゆえ、幼児期の教育と小学校教育の接続においては、幼児期の教育の小学校化でも

その逆でもなく、子どもの発達過程に合わせ、それぞれの教育の独自性を踏まえて進めていくことが求められる(酒井, 2012)。子どもたちが幼児期を十分生きながら、小学校以降の教育につなぐ保育実践が求められるのである。

また上野(2007)は、幼児期の教育と小学校教育とを円滑につなぐためには、就学能力に着目し、その能力を使って展開される遊びと活動を記述することこそが必要だと捉えた。ベネッセ次世代研究所(2012)の調査結果からは、幼児期に育むべき力として「生活習慣」と「学びに向かう力」が指摘された。さらに、今、求められる接続は、「目標」を共有し、「教育課程」をつなぎ、「教育活動」を検討していくことであった。

以上を踏まえ、本研究では、幼児期の教育と小学校教育をつなぐためには、子どもたちが幼児期を十分に生ききるような、幼児期の教育の独自性を生かした「アプローチカリキュラム」の作成が重要だと捉え、その第一歩として、今ある幼児期の教育を「目標」「教育課程」「教育活動」の観点から見つめ直すことを目的とする。

具体的には、1幼稚園の5歳児の「教育課程」と「指導計画(教育活動)」を分析し、「目標」として「学びに向かう力」(Table 3参照, ベネッセ次世代研究所, 2012)がどのように反映されているのか、検討していく。

2. 方法

2.1. 対象

N県内の3年保育を行っているN幼稚園5歳児の「教育課程」、及び「指導計画」(N幼稚園, 2009)。

2.2. 方法

幼児期の教育と小学校教育の接続の目標を「学びに向かう力」の育成と捉え、これが「教育課程」及び「指導計画(教育活動)」にどのように反映されているのか、読みとり、幼児期5歳児の教育から小学校教育への接続のあり方について考察を加える。この際、幼児期の教育の独自性でもある、環境構成と保育者の援助に着目する。

3. 教育課程・指導計画の分析

3.1. 教育課程と指導計画

3.1.1. 教育課程

N幼稚園の教育課程では、園の「教育目標」、年齢別の「年間目標」、1年を5期に分けた年齢ごとの「期間目標」が設定されている。各期には、特徴的な子どもの「発達の様相」と園でよく見られる「子どもの姿」が示されている。さらに、教育目標を達成するた

めの「ねらい」、ねらいを達成させるための「内容」が年齢、時期ごとに示されている。

3.1.2. 指導計画

保育の骨組みを示す「教育課程」を具体化したものが「指導計画」であり、具体的な「教育活動」が記されている。N幼稚園の「指導計画」には、「発達の様相」「ねらい」「内容」に加え、ねらいと内容を達成するために必要な「環境構成と援助のポイント」が示されている。

3.1.3. 分析

本研究では、主に「指導計画」における「環境構成と援助のポイント」について、「学びに向かう力」の観点から検討した。

3.2. 結果と考察

3.2.1. 教育目標

N幼稚園は「豊かな自然に囲まれた ころもからだも育つ幼稚園」を園の特色とし、自尊心¹⁾の育ちに視点をあてて教育課程を編成している。教育目標には「生き生きとあそぶ子ども（安定）」「精いっぱいがんばる子ども（充実）」「友達といっしょにのびる子ども（共存）」の3点が掲げられている。

3.2.2. 年間目標

5歳児の指導目標は、教育目標に基づきTable 4のように設定されている。「精いっぱいがんばる子ども」の内容は「学びに向かう力」の「あきらめずに挑戦する力」に一致する。N幼稚園の自尊心の育ちに視点をあてた教育課程は、挑戦する力を育成するものでもある。

Table 4 5歳児の指導目標(N幼稚園)

<p>生き生きとあそぶ子ども（安定） 自分のやりたいことをはっきりともち、遊びに意欲的に取り組めるようにしたい。自分なりによく考えたり工夫したりして、それぞれの思いを存分に出して遊びを楽しめる子どもに育てたい。</p>
<p>精いっぱいがんばる子ども（充実） 何事にも根気強く一生懸命取り組み、やり遂げようとする子どもに育てたい。遊びや仕事を進めていく中で生じるさまざまな問題に対しても、すぐあきらめたり、避けて通ったりしないで、精いっぱい受け止め、がんばろうとする気持ちを育てたい。</p>
<p>友達といっしょにのびる子ども（共存） 自分一人ではなく、友達と一緒に遊んだり、仕事をしたりする喜びや充実感を十分味わわせたい。その中で、互いに認め合い、助け合うことを自然に学びとり、友達と共感し、友達のことを思いやる気持ちの持てる子どもに育てていきたい。</p>

N幼稚園 2009 教育課程 p.11より引用。

3.2.3. 期間目標

教育目標を達成するために、期毎に「ねらい」が設定されている。ねらいも自尊心の育ちの観点から「安定」「充実」「共存」の3つの柱で構成される。次ページのTable 5に、5歳児の各期の子どもの「発達の様相」と保育の「ねらい」（期間目標）を「内容」とともに示した。

Table 5にあるように、N幼稚園の5歳児では「自分なり」「自分らしさ」「自分の思い／力」など、「自分」を大切にしながら、友達の中で「自分」を発揮し

ていくことがねらいとされている（下線部参照）。「共存」の項目では、「友達」とのかかわりがI期「親しみ」とII期「関心」から、IV期「協力」、V期「共通の目的」へと深まっている（波線部参照）。

「自己発揮」「協調性」は「学びに向かう力」である。卒園に向けて、これらの力の育ちの道筋が見てとれる。

3.2.4. 内容

各期のねらい（期間目標）を達成するために、保育者が指導し、子どもに身につけてもらいたいものが「内容」である（Table 5参照）。

Table 5の下線部にあるように、I期では、まず年長組の新しい環境に慣れ、新入園児の世話をするなど、年長児としての「喜び」と自覚をもって生活をつくっていくことが目標とされる。また「自分から」保育者や友達とかかわったり、あいさつをするなど、主体的、積極的に行動することも求められる。幼稚園の最年長児としての育ちが期待されている。

II期は、年長児としての新たな生活にも慣れ、生活や人とのかかわり、遊びを広げる時期である。「いろいろな活動／友達／音楽」（下線部）といった表現からも、世界がぐっと広がる様子が見てとれる。生活が落ちついてくると、「きまり」を守る、自分の思いを表現するとともに友達の話聞くなど（波線部）、自己統制や自己主張、他者受容といった「学びに向かう力」の育ちも期待される。

III期では、自分の思いや考え、力を「出す」ことが重視されている。「出す」だけでなく、「互いの気持ちを分かり合う」「相手のことを考える」など、他者を意識することも求められる。言葉での表現も、II期の「自分なりの言葉」で表現することから「相手にわかるように話す」ことが求められる。

IV期では、友達と同じ「目的」をもって「友達の気持ちや思いを考えながら行動する」、「イメージを共有しながら」「協力」するなど、「協調性」の育ちが一層目指される。葛藤場面でも自分なりに「解決」しようとしたり、最後まで「やりとげる」など「挑戦」「自己統制」といった「学びに向かう力」の育ちも期待されている。

V期になると、友達と「一体感」を味わいながら表現するなど、友達関係の深まりや遊びの充実が見てとれる。「協力」も「クラスやグループの一員」として「役割」をもって「やり遂げる」ことが目指され、幼稚園の最年長児として「年少・年中児のために」行動することも求められる。全体的に「友達同士で」「友達と一緒に」「友達と協力して」など、友達とのつながりの中で自己を十分に発揮し、充実感を味わうことが目標とされている。小学校入学を控え、今、幼稚園で過ごすこの時を、意欲的に、力を十分に発揮しながら、生きることが目指されているといえる。

Table 5 5歳児の発達の様相とねらい、及び内容（N幼稚園）

	I期（4～5月）	II期（5～7月）	III期（9～10月）	IV期（10～12月）	V期（1～3月）
発達の様相	年長組になった喜びと自覚をもって、新しい生活を楽しむ時期	自分なりの目的をもって、楽しみながら友達とのかわわりを広げていく時期	友達と意思を出し合って遊びや活動に取り組み時期	友達と協力して遊びを進める中で、自己を発揮していく時期	友達と共通の目的をもち、遊びや生活を展開していく時期
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 新しい環境に慣れ、のびのびと遊びに取組む 年長組としての喜びと自覚をもって生活することを楽しむ 先生や友達に親しみをもち、一緒に生活することを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いや考えを存分に出しながら遊ぶ 自分なりの目的をもって、積極的に遊んだり行動したりする 自分の体に関心をもち、健康な生活の仕方を見つける 食に関心をもち食べることが楽しむ 災害時などの合図や指示に従って、安全に気をつけて行動しようとする みんなで生活する中で必要なさまじりを守る 先生や友達と相談しながら、年長組の生活をくわいていく 新入園児の世話をすることで人の役に立つことを喜ぶ 戸外の自然に触れ、身近にある自然物を使って遊ぶ 自分から場に応じたあいざつをしようとする 先生や友達の話を興味をもって聞こうとする 自分の気持ちや考えを先生や友達に言葉で伝えようとする 描いたり作ったりすることを楽しむ、遊びに使用したり飾ったりする 友達と一緒に声を合わせて歌うことを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの中で自分の思いを表現させていく喜びを感じる 自分の力を思いきり出して、遊びや仕事に取り組もうとする 友達と考えや気持ちを話し合っ遊んだり生活したりする いろいろな運動に興味をもち、力を出して取り組む充実感を味わう 自分たちの生活の場を、自分たちで整えようとする 危険な場所や遊び方がわかり、安全に気をつけて行動しようとする 大勢の友達と力を合わせたり、競い合ったりする楽しさを味わう 友達と遊ぶ中で親しみを深め、互いの気持ちを分かち合う 相手のことを考えて、行っていないこととやしてはいけないことに気をつける 身の回りの自然物に興味をもち遊びに取り入れる 動物の世話を通して命あるものの存在に気付き大切にすること 運動会に期待をもち、競技やその準備に楽しんで取り組む 先生や友達の話を相手にわかるように話す 経験をもとに自分なりのイメージや考えを存分に表現する 遊びに必要なものを、用途を考えて描いたりつくったりする 友達と一緒に音楽のついで歌ったり、体を動かしたりする 	<ul style="list-style-type: none"> 自分らしさを発揮し、認められることに喜びを感じる 自分なりの課題をもっているいろいろな活動に取り組もうとする 友達と一緒に協力したり工夫したりして、遊びや活動を進めていく楽しさを味わう 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と共通の目的をもち、遊びや生活を展開していく時期 友達と共通の目的をもつて、活動を進めていく充実感を味わう
	内容	<ul style="list-style-type: none"> 進んで戸外に出て、体を十分に動かして遊ぶ 年長組の生活環境に慣れ、自分で行動することを楽しむ 気の合う友達と好きな遊びをする 先生や友達に親しみをもち、自分からかわらうとする 先生や友達と相談しながら、年長組の生活をくわいていく 新入園児の世話をすることで人の役に立つことを喜ぶ 戸外の自然に触れ、身近にある自然物を使って遊ぶ 自分から場に応じたあいざつをしようとする 先生や友達の話を興味をもって聞こうとする 自分の気持ちや考えを先生や友達に言葉で伝えようとする 描いたり作ったりすることを楽しむ、遊びに使用したり飾ったりする 友達と一緒に声を合わせて歌うことを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな運動に興味をもち、力を出して取り組む充実感を味わう 自分たちの生活の場を、自分たちで整えようとする 危険な場所や遊び方がわかり、安全に気をつけて行動しようとする 大勢の友達と力を合わせたり、競い合ったりする楽しさを味わう 友達と遊ぶ中で親しみを深め、互いの気持ちを分かち合う 相手のことを考えて、行っていないこととやしてはいけないことに気をつける 身の回りの自然物に興味をもち遊びに取り入れる 動物の世話を通して命あるものの存在に気付き大切にすること 運動会に期待をもち、競技やその準備に楽しんで取り組む 先生や友達の話を相手にわかるように話す 経験をもとに自分なりのイメージや考えを存分に表現する 遊びに必要なものを、用途を考えて描いたりつくったりする 友達と一緒に音楽のついで歌ったり、体を動かしたりする 	<ul style="list-style-type: none"> 自分らしさを発揮し、認められることに喜びを感じる 自分なりの課題をもっているいろいろな活動に取り組もうとする 友達と一緒に協力したり工夫したりして、遊びや活動を進めていく楽しさを味わう 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな遊びに意欲的に取り組み、力いっぱい活動する トラブルや困難などの葛藤場面でも前向きに取り組み、自分なりに解決しようとする 遊びや活動を最後までやりとげようとする グループの友達と同じ目的をもち、思いを出し合いながら遊んだり仕事をしたりする 友達の気持ちや思いを考えながら行動する 高齢者や地域の人などに親しみをもってかわかる 身の回りの環境に積極的にはたらきかけ、自分たちで遊びの場をつくりだしていくこととする 自然の不思議さ、おもしろさに気付き、それらにかかわって遊ぶ 身近な社会の様子に関心をもつ 目的に合った遊具や用具を選び、考えたり試したりしながら遊ぶ 自分の考えを伝えるとともに、友達の考えもよく聞こうとする 生活のいろいろな場面で言葉の楽しさや美しさに気付き、興味をもつ 絵本やお話に親しみ、自分のイメージをふくらませたり、心情を感じとったりしながら聞く 友達とイメージを共有しながら、表現することを楽しむ

N幼稚園 2009 教育課程 p.14 より引用。下線は筆者による。

3.2.5. 指導計画：環境構成と保育者の援助

N園の「指導計画」では、ねらいと内容を達成するために、「教育活動」として「環境構成」と「保育者の援助」のポイントが具体的に記されている。Table 6に「環境構成」と「保育者の援助」を抜粋し、内容ごとにまとめて記した。いずれも、Table 5のねらいに示した園の3つの教育目標（安定・充実・共存）に対応した項目が立てられている。

以下、期ごとに分析・考察を加え、最後に「学びに向かう力」との関連を述べる。

(1) 環境構成

●**安定** 幼稚園生活も2年目、3年目となり、すでに園環境に馴染んでいるであろう5歳児²⁾では、新学期のⅠ期においても、3、4歳児に見られた「居場所」や「遊びの拠点」の提供など、環境構成による「安心」「安定」への配慮（横山他、2012）は、ほとんど見られなかった。後述するが、「安定」は「モノの環境」からではなく、主に「保育者」との信頼関係を基盤に「人との関係」から、得られるよう配慮されていた。

Ⅱ期以降は「安定」していることを前提に、遊びや活動に取り組み発展させる中で、自己を発揮し、喜びや満足感、充実感を味わうことが目指されていた。具体的には、Ⅱ期では「解放的」な気分を十分味わいながら「繰り返し」が楽しい遊びを体験し、Ⅲ期では「持続力」「集中力」をもって「繰り返し」活動に取り組み、思いを実現する「喜び」を感じることで、Ⅳ期になると「表現」や友達や地域の「人」とかかわる活動など、様々な場面で自己を発揮することが求められていた。そして、小学校入学を控えたⅤ期では、Table 6に挙げられた項目の多さにも現れているように、さらに多様な活動に意欲的に取り組むことが期待されていた。

このように5歳児では「安定」そのものを得ることがねらいではなく、3、4歳児から培ってきた「安定」を土台に、自己を発揮しながら多様な活動に友達と一緒に根気強く取り組み、やり遂げる経験が可能になる環境構成が求められている。

●**充実** Ⅰ期は「年長児」としての生活の基盤づくりの時期である。年長児としての自覚がもてるように、生活の場を整える過程では、年長児ならではの「ちびっこせんせい」³⁾の役割が設けられる。喜びや自信をもって新学期をスタートすることが期待されている。Ⅱ期になると、一気に生活の幅が広がられる。グループ単位からクラス全体の活動に広がり、運動遊び、食育など、多様な活動が取り入れられる。また、1日の流れを見通したり、生活を振り返るなど、時間を過去、未来と行き来する。経験の多様性だけではなく、時間的にも広がりが生まれる。

Ⅲ期以降は、人間関係もさらに広がりを見せる。Ⅳ期になるとクラスの枠を超えたグループ活動が始まり、Ⅴ期になると学年全体の活動に取り組む。こうし

た人間関係の広がりに伴い、活動の取り組み方の質も変わっていく。Ⅱ期では、活動に「取り組む」こと自体が重視されていたが、Ⅲ期になると「挑戦」し、力を出して頑張る取り組みことが求められる。Ⅳ期では、その頑張りに自分なりの「課題」をもつことが目指され、Ⅴ期になると、集団の一員としての「役割」を意識し、責任をもってやり遂げることが期待される。

このように「充実」では、生活の基盤を整えた上で、まずは活動に取り組んでみる、そして少し難しいことにも挑戦し、力を発揮する。次に、課題をもって取り組み、役割や責任をもってやり遂げていく。こうしたことができるようになる援助が目指されている。

●**共存** Ⅰ、Ⅱ期では多人数の友達とかかわる遊びの環境が構成されている。単にかかわるだけではなく、友達のことをよく知る機会も設定され、関係を広げ、深めることが求められている。特にⅡ期では、異年齢交流も加わり、さらに多様な人間関係の構築が期待されている。

Ⅲ期になると、広がった人間関係の中で「連帯感」や「協力」など、つながりを深めることができる環境構成が求められる。さらにⅣ期では、思いや「目的」を「共有」しながら遊びや活動に取り組むことが期待され、Ⅴ期では同じ「課題」に向かって、友達とのつながりを深めながら取り組んでいくことが目指されている。

このように「充実」では、まず多人数の友達とかかわる遊びの環境を保障し、徐々に連帯感や協力、共通の目的をもって取り組む「協同的な活動」が可能になる環境構成が目指されている。

(2) 保育者の援助

●**安定** 環境構成では「安定」への配慮はほとんど見られなかったが、保育者の援助では丁寧な働きかけが目指されている。Ⅰ期では、子ども理解をもとに保育者との信頼関係を築くことがまず重視され、保育者とともに遊びながら子どもが新しい環境になじんでいくような援助が求められている。

Ⅱ期では、子ども同士をつなぐことに重点が置かれる。保育者が友達の思いや考えを伝えることで、互いに認め合える関係を築いていくことが求められる。Ⅲ期になると、友達との関係の中で思いや考えを出し、粘り強く取り組み実現させることで、喜びや充実感を感じることができるよう援助が期待される。そのため、保育者も子どもたちの中に入って援助することが求められる。

Ⅳ期では、子どもの思いや工夫を伝えながら、自分らしさが出せる雰囲気をつくること目指される。相談・協力する場面をつくり、トラブルもプラスの体験と捉えて、保育者も話し合いに参加しながら、自尊感の育ちにつながる援助を行うことが求められる。さらにⅤ期では、保育者が友達の良さを伝えることで、自信を高めたり、友達関係を深めることができる援助が

Table 6 5 歳児の環境構成と保育者の援助 (N 幼稚園)

I 期 (4～5月)	II 期 (5～7月)	III 期 (9～10月)	IV 期 (10～12月)	V 期 (1～3月)
<p>●新しい環境の中で遊びのびと遊びに取り組み始めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 制作材料：子どもが扱い慣れたものを用意しておく。用途に応じて使い分けられるように数種類おく。つくったものを飾ることが出来る場合も用意しておく。 	<p>●思いや考えを存分に出しなが遊ぶように</p> <ul style="list-style-type: none"> 遊びの環境づくり：知的好奇心を刺激し、繰り返すことやおもしろさが増し、満足感が味わえるような遊び(シヤボウ玉、色水、紙飛行機など)の環境を用意する。 感興遊び(水・粘土・気球・どろんどろん)：全体で感興を楽しむ。解放的な気分を十分に味わえるようにする。 音楽遊び：遊びにぶさぶさしい音楽が運べるように曲を用意する。 共通の目的をもつ活動：友達と一緒に思いや考えを出し合っ取り組み充実感が味わえるようにする。 	<p>●思いを実現させていく喜びを感じられるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 自然物の遊び(土や砂)：繰り返し楽しめる遊びを投げかけ、思いを実現させていくおもしろさが感じられるようにする。 素材・用具のおもしろさが味わえるようにする。 相対：協力する活動：それぞれの思いや行動を受け入れ、認め合う中で、安心して自分の力が発揮できるようにする。 地域のひととふれあふ機会：事前の話し合い、相手の立場に立つて考える大切さに気付くようになり、活動後は、満足感や充実感を味わえるようにする。 友達を認める場面：友達のいいところを見つけ合う場面をつくり、認めてもらう喜びを感じられるようにする。 	<p>●いろいろな場面で自分らしさを発揮できるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 自然物(木の葉、枝、ツル)を使っての表現：表現を通して自分らしさを発揮する満足感を味わえるようにする。 相談：協力する活動：それぞれの思いや行動を受け入れ、認め合う中で、安心して自分の力が発揮できるようにする。 地域のひととふれあふ機会：事前の話し合い、相手の立場に立つて考える大切さに気付くようになり、活動後は、満足感や充実感を味わえるようにする。 友達を認める場面：友達のいいところを見つけ合う場面をつくり、認めてもらう喜びを感じられるようにする。 	<p>●大きくなっていくという自信をもって、意欲的に過ごせるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己表現の場：得意なことを披露する機会などをつくること 自分で自信をもち、自分のよさを発揮していけるようにする。 文字・数への関心：年長児の経験から手紙のやりとりをしたり、文字や数に触れる機会を増やし、関心をもちようとする。 冬の自然現象(雪・霜・氷)：自然現象を十分に体験できるようにする。考え、試すことに興味を持てるように材料・用具などを提供する。 園生活の振り返り：クラスのつながりや充実感を味わいながら、友達と心を通わせて残りの生活を十分に楽しめるようにする。 卒園・入学：友達と一緒に園生活を振り返ったり、大きく変わる喜びを感じたりできるようにする。 感謝・別れの寂しい気持ちの表現：お世話になった人や年少・年中児と過ごして、気持ちを自分なりに言葉や行動で表せるようにする。 小学校体験：授業を体験したり、小学校がイメージでできることを具体的に伝えることで、小学校入学の期待が高まるようにする。 卒園式：1人ひとりの子どもが引き立つような式の進行の仕方を工夫し、年長らしい成長の感じられる式になるようにする。
<p>●年長児としての喜びと自覚をもてるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活の場を整える：自分たちで生活の場を整えていく活動をする。年長児としての自信がもてるようにする。 生活グループ：4、5人の生活グループをつくり、成長を実感しながら年長児ならではの生活を楽しむようにする。 ちびっこせんせい：各グループに股付け、友達のことを任せられる喜びや自信を感じられるようにする。 遊具：数や量き方に配慮し、分類したり、数量を意識したりできるようにする。 	<p>●いろいろな活動に積極的に取り組めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> クラス全体で取り組む活動：同じ目的に向かって取り組む楽しさを体験できるように、相談しながら進めていく。 昆虫：生態の特徴や成長の過程を写真や絵図で提示し、より多くの子ども達が興味をもてるようにする。 運動遊び：体を動かすおもしろさを味わいながら、目的に向かって頑張る充実感が感じられるようにする。 野菜栽培：野菜の成長を観察したり、味わったりする中で、種物を育てることの楽しさや喜びを味わえるようにする。 1日の流れの提示：見通しをもって生活できるようにする。 生活振り返る機会：生活に必要なことに取り組む大切さに気づかせ、情況に応じた行動ができるようにする。 	<p>●遊びや仕事に力を出して取り組めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動遊び：目につきやすい所に運動遊びのできる遊具を出しておくことで、やってみようという気持ちになられるようにする。 運動会を連想させる遊具(玉入れ、綱引きなど)を出しておく、日常的に遊ぶ中で運動会への期待が高まるようにする。 競争：挑戦し、挑戦する気持ちで頑張るものを見いだし、掛け合いをする。 運動は掛け合い、目標を細かく区切ったりして、どの子どももやりたという満足感を味わい、意欲を高めていくようにする。 昆虫：取った虫を調べたり、飼ったりして、飼育の楽しさや責任感を感じられるようにする。 	<p>●自分なりの課題をもって活動に取り組めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> がんばりカード：目的や課題が目に見え、がんばりカードを投げかけ、主体的に自分のペースで取り組めるようにする。 競争：挑戦し、挑戦する気持ちで頑張るものを見いだし、掛け合いをする。 運動は掛け合い、目標を細かく区切ったりして、どの子どももやりたという満足感を味わい、意欲を高めていくようにする。 昆虫：取った虫を調べたり、飼ったりして、飼育の楽しさや責任感を感じられるようにする。 	<p>●友達と協力しながら遊びや活動をすすめていけるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達が集まり思いを共有する遊び：遊びの目的を共に、いろいろな友達が集まり、思いを共有しながら遊ぶおもしろさが広がっていくようにする。 同じ思いをもって取り組む活動：遊びを通して友達を助け合ったり、同じ思いをもって取り組む活動に投げかけ、同じ思いをもって遊びや活動に取り組んでいけるようにする。
<p>●先生や友達と親しみながらも遊ぶように</p> <ul style="list-style-type: none"> 多人数の遊びの場づくり：互いのよさを感じられる言葉かけ、いろいろな友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにする。 友達を知る機会：1人ひとりがクローズアップされる場面などをつくり、同じグループの友達のことを知り、親しみの気持ちをもてるようにする。 グループ：グループの中の自分の居場所を感じられるようにする。 クラスへの所属感：クラスの一員としての自分を意識しながら、気持ちよく仲間と遊ぶようにする。 	<p>●友達と協力しながら遊びや活動をすすめていけるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達が集まり思いを共有する遊び：遊びの目的を共に、いろいろな友達が集まり、思いを共有しながら遊ぶおもしろさが広がっていくようにする。 同じ思いをもって取り組む活動：遊びを通して友達を助け合ったり、同じ思いをもって取り組む活動に投げかけ、同じ思いをもって遊びや活動に取り組んでいけるようにする。 	<p>●遊びや仕事に力を出して取り組めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動遊び：目につきやすい所に運動遊びのできる遊具を出しておくことで、やってみようという気持ちになられるようにする。 運動会を連想させる遊具(玉入れ、綱引きなど)を出しておく、日常的に遊ぶ中で運動会への期待が高まるようにする。 競争：挑戦し、挑戦する気持ちで頑張るものを見いだし、掛け合いをする。 運動は掛け合い、目標を細かく区切ったりして、どの子どももやりたという満足感を味わい、意欲を高めていくようにする。 昆虫：取った虫を調べたり、飼ったりして、飼育の楽しさや責任感を感じられるようにする。 	<p>●自分なりの課題をもって活動に取り組めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> がんばりカード：目的や課題が目に見え、がんばりカードを投げかけ、主体的に自分のペースで取り組めるようにする。 競争：挑戦し、挑戦する気持ちで頑張るものを見いだし、掛け合いをする。 運動は掛け合い、目標を細かく区切ったりして、どの子どももやりたという満足感を味わい、意欲を高めていくようにする。 昆虫：取った虫を調べたり、飼ったりして、飼育の楽しさや責任感を感じられるようにする。 	<p>●友達と協力しながら遊びや活動をすすめていけるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達が集まり思いを共有する遊び：遊びの目的を共に、いろいろな友達が集まり、思いを共有しながら遊ぶおもしろさが広がっていくようにする。 同じ思いをもって取り組む活動：遊びを通して友達を助け合ったり、同じ思いをもって取り組む活動に投げかけ、同じ思いをもって遊びや活動に取り組んでいけるようにする。
<p>●先生や友達と親しみながらも遊ぶように</p> <ul style="list-style-type: none"> 多人数の遊びの場づくり：互いのよさを感じられる言葉かけ、いろいろな友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにする。 友達を知る機会：1人ひとりがクローズアップされる場面などをつくり、同じグループの友達のことを知り、親しみの気持ちをもてるようにする。 グループ：グループの中の自分の居場所を感じられるようにする。 クラスへの所属感：クラスの一員としての自分を意識しながら、気持ちよく仲間と遊ぶようにする。 	<p>●友達と協力しながら遊びや活動をすすめていけるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達が集まり思いを共有する遊び：遊びの目的を共に、いろいろな友達が集まり、思いを共有しながら遊ぶおもしろさが広がっていくようにする。 同じ思いをもって取り組む活動：遊びを通して友達を助け合ったり、同じ思いをもって取り組む活動に投げかけ、同じ思いをもって遊びや活動に取り組んでいけるようにする。 	<p>●遊びや仕事に力を出して取り組めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動遊び：目につきやすい所に運動遊びのできる遊具を出しておくことで、やってみようという気持ちになられるようにする。 運動会を連想させる遊具(玉入れ、綱引きなど)を出しておく、日常的に遊ぶ中で運動会への期待が高まるようにする。 競争：挑戦し、挑戦する気持ちで頑張るものを見いだし、掛け合いをする。 運動は掛け合い、目標を細かく区切ったりして、どの子どももやりたという満足感を味わい、意欲を高めていくようにする。 昆虫：取った虫を調べたり、飼ったりして、飼育の楽しさや責任感を感じられるようにする。 	<p>●自分なりの課題をもって活動に取り組めるように</p> <ul style="list-style-type: none"> がんばりカード：目的や課題が目に見え、がんばりカードを投げかけ、主体的に自分のペースで取り組めるようにする。 競争：挑戦し、挑戦する気持ちで頑張るものを見いだし、掛け合いをする。 運動は掛け合い、目標を細かく区切ったりして、どの子どももやりたという満足感を味わい、意欲を高めていくようにする。 昆虫：取った虫を調べたり、飼ったりして、飼育の楽しさや責任感を感じられるようにする。 	<p>●友達と協力しながら遊びや活動をすすめていけるように</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達が集まり思いを共有する遊び：遊びの目的を共に、いろいろな友達が集まり、思いを共有しながら遊ぶおもしろさが広がっていくようにする。 同じ思いをもって取り組む活動：遊びを通して友達を助け合ったり、同じ思いをもって取り組む活動に投げかけ、同じ思いをもって遊びや活動に取り組んでいけるようにする。

<p>●新しい環境の中で遊びに取組めるように</p> <p>○保育者を通して安定を得る</p> <p>・子どもも理解：居場所を見つけて安定した気持ちで遊ぶようにする。</p> <p>・信頼関係：不安定になる子どもに優しく、安心感をもち、信頼関係を築く。</p> <p>・新しい環境：保育者と一緒に遊ぶ中、年齢組の大型遊具のおもしろさや、扱い方を知らせていくようにする。</p> <p>・クラスの枠を超えた遊び：保育者も戸外に出で遊ぶようにする。</p> <p>・自然物とのふれあい：子どもと一緒に園内を散歩し、身近な自然に興味を持ち、春の園を楽しむ。</p>	<p>●思いや考えを存分に遊びながら遊べるように</p> <p>○友達に伝える</p> <p>・周りに伝える。思いや考えを出している場面を十分認め、周りに子どもに伝える。認め合える雰囲気をつくり、安心して、自分の思いに自信をもって行動できるようにする。</p> <p>・思いの明確化：子どもが思い描いている目的を明確にし、思いや考えを出して遊ぶ充実感が味わえるようにする。</p> <p>・話し合い：楽しいこと、遊んでくれている、活動を受け合い、遊びの楽しさを分かち合うようにする。</p> <p>・刺激を受け合いたいから、遊びの楽しさを分かち合いたがるようにする。</p> <p>・活動遊び：保育者も一緒に楽しむ中、友達と話し合い、遊びの楽しさを分かち合おうとする。楽器を大事に使うことも伝える。</p>	<p>●思いや考えを存分に遊びながら遊べるように</p> <p>○充実感、達成感</p> <p>・保育者と一緒に：思いが実現できる、保育者も一緒に：思いが実現でき、喜び、達成感を感じるようにする。</p> <p>・体動かすことが楽しめる、上達していることを伝える。自分なりのアイデアで遊ぶようになるところや、思いや考えを出して遊ぶ楽しさを感じていくようにする。</p> <p>・運動会、練習返り組む中、おもしろさや楽しさを感じていく子どもを促し、共感すること、より楽しさを増し、その輪が広がっていくようにする。</p>	<p>●思いや考えを存分に遊びながら遊べるように</p> <p>○友達とつなぐ</p> <p>・周りに伝える。子どもが工夫などを周りに子どもにも伝える。認め受け入れ合える雰囲気をつくるようにする。</p> <p>・思いや考えを存分に：思いや考えを存分に表現できるようにする。</p> <p>・友達関係を深める：自分たちの考えで遊ぶ展開するおもしろさや共感する。思いや考えを分かち合いたいから、自信をもって自分らしさを表現できるようにする。</p> <p>・友達関係を深める：自分たちの考えで遊ぶ展開するおもしろさや共感する。思いや考えを分かち合いたいから、自信をもって自分らしさを表現できるようにする。</p> <p>・友達関係を深める：自分たちの考えで遊ぶ展開するおもしろさや共感する。思いや考えを分かち合いたいから、自信をもって自分らしさを表現できるようにする。</p> <p>・友達関係を深める：自分たちの考えで遊ぶ展開するおもしろさや共感する。思いや考えを分かち合いたいから、自信をもって自分らしさを表現できるようにする。</p>	<p>●思いや考えを存分に遊びながら遊べるように</p> <p>○友達関係を深める</p> <p>・周りに伝える。子どもが工夫などを周りに子どもにも伝える。認め受け入れ合える雰囲気をつくるようにする。</p> <p>・思いや考えを存分に：思いや考えを存分に表現できるようにする。</p> <p>・友達関係を深める：自分たちの考えで遊ぶ展開するおもしろさや共感する。思いや考えを分かち合いたいから、自信をもって自分らしさを表現できるようにする。</p> <p>・友達関係を深める：自分たちの考えで遊ぶ展開するおもしろさや共感する。思いや考えを分かち合いたいから、自信をもって自分らしさを表現できるようにする。</p> <p>・友達関係を深める：自分たちの考えで遊ぶ展開するおもしろさや共感する。思いや考えを分かち合いたいから、自信をもって自分らしさを表現できるようにする。</p>
<p>●年長児としての喜びと自覚をもてるように</p> <p>○生活をつくる・生活習慣</p> <p>・自分たちで生活を定める。ちびっこせんせい、自分たちで生活に必要な約束を決める。年長児の生活に必要な約束を決める。</p> <p>・自然物とのふれあい：子どもと一緒に園内を散歩し、身近な自然に興味を持ち、春の園を楽しむ。</p>	<p>●いろいろな活動に積極的に取り組めるように</p> <p>○活動の幅をひろげる</p> <p>・見虫、飼育を通して：成長を楽しみ、驚きや感動を味わうことにも興味をもち、科学的な興味・好奇心を育てる。見虫、飼育を通して：成長を楽しみ、驚きや感動を味わうことにも興味をもち、科学的な興味・好奇心を育てる。</p> <p>・プール遊び：準備や整理を自分で行う。プール遊び：準備や整理を自分で行う。</p> <p>・自然物とのふれあい：子どもと一緒に園内を散歩し、身近な自然に興味を持ち、春の園を楽しむ。</p>	<p>●遊びや仕事をこなして出を出し遊びながら遊べるように</p> <p>○活動の幅をひろげる・深める</p> <p>・頑張り、挑戦する気持ち：頑張った充実感や達成感を味わう。頑張り、挑戦する気持ち：頑張った充実感や達成感を味わう。</p> <p>・自然物とのふれあい：子どもと一緒に園内を散歩し、身近な自然に興味を持ち、春の園を楽しむ。</p> <p>・見虫、飼育を通して：成長を楽しみ、驚きや感動を味わうことにも興味をもち、科学的な興味・好奇心を育てる。見虫、飼育を通して：成長を楽しみ、驚きや感動を味わうことにも興味をもち、科学的な興味・好奇心を育てる。</p>	<p>●自分なりの課題をもって活動に取り組めるように</p> <p>○活動の幅をひろげる・深める</p> <p>・遊びに没頭する姿を見守る。より高度なことを求める気持ちに共感し、認め、達成感を感じ、自信をもてるようにする。</p> <p>・「がんばりカード」：頑張っている姿を認め、実感でき、相手が必要とする活動の時は、個別に援助したり、励まし、達成感が味わえるようにする。</p> <p>・絵の話を聞かせ、読後に気持ちの良い、経験が豊富な子どもに話を振り返し、話していきながら、自信を持って話を進めるようにする。</p> <p>・知ること、伝えること、楽しむこと、やるべきことを感じながら、興味・関心の幅を広げていくようにする。</p>	<p>●役割をもち、やりとりはよくとすることが出来るように</p> <p>○活動の幅をひろげる</p> <p>・「きくみかきょう」：普段とは違う友達と相談することで、トラブルになることもあるが、役割を意図し、責任をもってやりとりをする。</p> <p>・「きくみかきょう」：普段とは違う友達と相談することで、トラブルになることもあるが、役割を意図し、責任をもってやりとりをする。</p> <p>・「きくみかきょう」：普段とは違う友達と相談することで、トラブルになることもあるが、役割を意図し、責任をもってやりとりをする。</p>
<p>●先生や友達と親しくおぼえるように</p> <p>○保育者への親しみ</p> <p>・保育者への親しみ：親しみをもってあいざつすることの心地よさを感じられるようにする。</p> <p>・信頼関係：年長児の環境で遊ぶ喜びに共感し、保育者と一緒に楽しむ中、信頼関係を築く。</p>	<p>●友達と協力しながら遊びながら遊べるように</p> <p>○友達と協力する</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p>	<p>●友達と協力しながら遊びながら遊べるように</p> <p>○友達と協力する</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p>	<p>●友達と協力しながら遊びながら遊べるように</p> <p>○友達と協力する</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p>	<p>●友達と協力しながら遊びながら遊べるように</p> <p>○友達と協力する</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p> <p>・友達と協力して遊ぶ。友達と協力して遊ぶ。</p>

求められる。

このように「安定」では、保育者との信頼関係を基盤に、友達関係の中で自己を發揮し、認めてもらったり、思いが実現する経験を重ね、自信を高めていけるような援助が目指されている。

●**充実** I期では、まず「年長児」として自分たちで生活をつくっていくための援助が重視され、生活の主体者としての意識が持てるような援助が求められる。II期になり年長児としての生活が安定してくると、活動の幅が広げられ、自信・責任感といった内面を育む援助が期待される。子どもたちが自分で考え、決定する場面が大切にされ、認めたり、励ましたり、一緒に考えたりしながら、実行まで丁寧にかかわる援助が求められている。

III期以降は、活動の幅を深める援助も目指される。III期では、頑張りや挑戦する気持ちが生まれるものを子どもたちに投げかけ、励ましたり手助けしながら、頑張った充実感やできた喜びを味わえるような援助が求められる。IV期になると、子どもが頑張る姿を見守ったり、認める、共感する、励ます、個別に援助するなどしながら、達成感や充実感が味わえるような援助が目指される。V期では、トラブルや葛藤の場面でも、子どもの育ちを信じて待ったり、見守る、時には励ますなど、子どもが自分で乗り越えていけるような援助が求められる。

●**共存** I、II期では、I期で築いた保育者と子どもとの信頼関係をもとに、子どもたちがお互いを知り、友達関係を深め、広げていくような援助が目指される。「学びに向かう力」の協調性の基盤がここで形成されている。

さらにII期になると、異年齢交流で頑張っている姿を認めたり、励まし、年少の子どもとの関係を深められるような援助が目指される。

III期では、友達関係をより一層深めていけるような援助が求められる。友達の反応や表情に気付けるような言葉がけをしたり、保育者が仲介して思いを伝えたり、考えを出し合っている姿を認めたりしながら、相手のことを考えた行動ができるように導く援助が目指される。

IV期になると、友達と協力して遊びや活動が進めていけるような援助が求められる。子どもが同じ思いをもって取り組んでいけるように、保育者も仲間の一員となって遊びに加わりながら、子どもの発想を取り上げ全体に広めたり、共通体験を生かした遊びや活動のきっかけを投げかけたりする援助が必要となる。

就学を控えたV期では、友達と共通の目的をもって遊びや活動を進めていけるような援助が求められる。自分たちで目的が持てるように助言したり、試行錯誤しながら進めていく様子を見守ったり、時には励まし、アドバイスをしながら、「協同性」の育ちを支える援

助が期待される。また、意見の衝突やもめごとが生じた時には、仲裁に入っている子どもを認めたり、周りにいる子どもに意見を求めるなどして、自分たちで解決できるような援助が目指される。

(3)「学びに向かう力」との関連

N幼稚園の3つの教育の柱である「安定」「充実」「共存」と「学びに向かう力」の関連を見ると、「安定」を基盤にしながら、「安定」も含めた「充実」「共存」の教育活動の中で、「学びに向かう力」の特に「自己主張」「自己統制」「協調性」の育ちが見てとれた。そこで、ここではこれら3点の「学びに向かう力」に着目し、「環境構成」、及び「保育者の援助」との関連をみていく。

●**環境構成** 全体的な特徴として、1年を通して「モノ」の準備や配置よりも「遊び・活動・場面」などを投げかけ、提供する援助が多かった。上野(2007)は「就学能力」はその能力を含んだ活動を展開することによって形成されると述べていた。遊びを通して学ぶ保育においては、育てたい力が明確にある場合、その力を育む具体的な「遊び」や「活動」を提案する実践方法が取り組みやすいのかも知れない。

各項目をみていくと「安定」では、3、4歳児からの園生活で培ってきた「安定」を基盤に、自分の思いを出しながら(自己主張)(II期)、持続力、集中力をもって活動に取り組み(自己統制)(III期)、人と「協調」する中で(IV期)、自信をもって自己を發揮していくこと(自己主張)(V期)が目指されていた。

「充実」では、まず活動に取り組む機会を保障した上で(II期)、挑戦し、力を出して頑張る(自己統制・自己主張)(III期)経験を求め、さらに課題意識を持ち(自己統制)(IV期)、集団の一員としての役割を意識しながら、責任を持ってやり遂げること(自己統制)(V期)が目指されていた。

「共存」では、人間関係の幅を広げながら(II期)、徐々に「協力」(III期)、「目的」の共有(IV期)、同じ「課題」に取り組む(V期)など、友達とのつながりを深めることが求められていた(協調性)。

●**保育者の援助**

全体的な特徴として、遊びや活動の中に、保育者が仲介者として入る援助が多く見られた。投げかけた遊びや活動が展開していく過程を、保育者が見守りながら、必要と感じた時には仲介に入るといことだろうか。

具体的には「安定」では、子どもとの信頼関係を築いた(I期)後に、思いを周りに伝えるなど子ども同士をつなぎ(協調性)(II期)、友達の中で自己を發揮しながら(自己主張)、粘り強く取り組み、やり遂げた充実感を味わって(III、IV期)、自信を高めたり友達関係を深めていくこと(協調性)(V期)が目指されていた。

「充実」では、生活の主体者として(自己主張)(I

期)、活動の幅を広げながら自信(自己主張)や責任感(自己統制)を育み(Ⅱ期)、頑張りや挑戦する経験(自己統制)を通して充実感を感じ(Ⅲ期)、より高度なものを求めて遊びに没頭しながら(自己統制)(Ⅳ期)、トラブルや葛藤を自分で乗り越えていける(自己統制)(Ⅴ期)育ちが目指されていた。

「共存」では、保育者との信頼関係をもとに(Ⅰ期)、友達関係を広げ(Ⅱ期)、友達の思いや考えに気付く(Ⅲ期)、協力し合いながら(Ⅳ期)、共通の目的をもって活動を進めていけるようになる(Ⅴ期)ことが目標とされていた(協調性)。

このように、N幼稚園の指導計画における「安定」「充実」「共存」は、「学びに向かう力」の「自己主張」「自己統制」「協調性」「協調性」の育ちにつながっていた。

4. 幼児期の教育と小学校の教育をつなぐアプローチカリキュラムの作成に向けて

本研究では、幼児期の教育と小学校教育の接続について、求められる背景と経緯を概観した後、幼稚園5歳児の「教育課程」「指導計画」を対象に、「幼小接続の在り方」(2010)のいう「目標」―「教育課程」―「教育活動」の3段階構成による分析を行った。その結果、既に行われている幼稚園の教育活動の中に、小学校教育につながる「学びに向かう力」が埋め込まれており、これを意識的に取り上げ、系統立てることで、有効なアプローチカリキュラムが作成可能である手応えを感じた。しかし、今後の課題として、次の3点が見えてきた。

(1) 3、4歳児の育ちの上にある5歳児の育ち

幼児期の教育を小学校教育につなぐ「アプローチカリキュラム」では、小学校との接続期として5歳児の2学期以降を対象に作成されることが多い。しかし、本研究で見た「学びに向かう力」の最も根底にあると考えられた「安定」、特に「環境」における「安定」は、3、4歳児から培われたものが前提となっていた。

この例を挙げるまでもなく、子どもの発達の連続性を考えれば、すべての子どもの育ちは、その年齢までの子どもの育ちの上に成立している。それゆえ、アプローチカリキュラムの作成においても、就学前までに育てたい子どもの姿を描きながら、3、4歳児からの子どもの育ちの過程を辿っておく必要がある。例えば、N幼稚園では「文字」とのかかわりはⅤ期のみで取り上げられていた(Table 6参照)。それゆえ、5歳児Ⅴ期までの文字とのかかわりの過程を「教育課程」と「指導計画」においても、辿っていくことが必要である。

(2) 子ども自らが「遊び・活動・場」をつくる援助

子ども自らが主体的な生活者として自立していった

めには、「就学能力」がその能力を含んだ活動を展開することによって形成される(上野, 2007)としても、具体的な遊びや活動を投げかけるだけではなく、子ども自身が遊びや活動をつくりあげていく経験を十分に確保することも必要である。例えば「子どもが興味関心のあるもの、育ちに必要な体験のできる遊具や用具を十分に設置、準備する」(幼児教育と小学校教育の連携カリキュラム編集会議, 2012, p.34)といった環境構成も求められる。

(3) 場と時間を保障する援助

上記のように、子どもたちが自ら遊びや活動を作っていくためには、場所と時間の確保が必須である。N幼稚園の指導計画には「時間」についての記載が見られなかった。子どもの中から遊びや活動が生まれてくる時間を意識的に保障し、じっくりと待つ保育も必要である。

引用及び参考文献

- 網野武博・増田まゆみ・秋田喜代美・尾木まり・高辻千恵・一前春子 2012 保育所、幼稚園、小学校の連携等に関する現状分析及び今後の展望に関する研究Ⅲ, 東京家政大学生生活科学研究研究所研究報告, 35, 1-11.
- ベネッセ次世代研究所 2012 速報版 幼児期から小学校1年生の家庭教育調査
- 藤井穂高 2010 小1プロブレム及び幼小連携の研究及び政策動向, 東京学芸大学, 「小1プロブレム研究推進プロジェクト 報告書」(pp.1-10)
- 堀越紀香 2012 幼小接続期を支える, 初等教育資料, 893, 70-73.
- 一前春子・秋田喜代美 2011 取り組み段階の観点からみた地方自治体の幼小連携体制作り 乳幼児教育学研究, 20, 13-26.
- 一前春子・秋田喜代美・増田まゆみ・高辻千恵 2011 幼小連携に対する視点の変化: 「幼児の教育」の記事の分析から, 国際幼児教育研究, 19, 29-38.
- 無藤 隆 2009 なぜ今、幼・保・小連携が必要なのか? 日本標準教育研究所(企画・編)「今すぐできる幼・保・小連携ハンドブック」(pp.8-11). 日本標準
- 酒井 朗 2012 学校段階間の連携・接続の重要性について, 初等教育資料, 893, 2-5.
- 酒井 朗・横井紘子 2011 「保幼小連携の原理と実践: 移行期の子どもへの支援」 ミネルヴァ書房
- 新保真紀子 2001 「小1プロブレムに挑戦する」 明治図書
- 高橋光幸 2012 「就学前カリキュラム」と5歳児保育を考える, 現代と保育, 82, 44-57.
- 田丸敏高 2012 幼児期から児童期へ: 発達の特徴と保育・教育の課題, 現代と保育, 82, 24-37.

東京学芸大学「小1プロブレム研究推進プロジェクト」(代表 大伴潔) 2010 「小1プロブレム研究推進プロジェクト報告書」平成19年度～21年度 特別教育研究経費事業 小1プロブレム研究による生活指導マニュアル作成と学習指導カリキュラムの開発

上野ひろ美 2007 保幼小連携の課題に関する考察, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 16, 109-121.

横井紘子 2010 保育所・幼稚園と小学校の違い 酒井朗・横井紘子 「保幼小連携の原理と実践: 移行期子どもへの支援」(pp.29-48). ミネルヴァ書房

横山真貴子・長谷川かおり・竹内範子・掘越紀香 2012 幼稚園の4歳児クラスにおける環境構成と保育者の援助のあり方: 新入園児と進級児の環境移行に着目して, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 20, 45-54.

横山真貴子・竹内範子・上野由利子・掘越紀香 2011 新たな幼児教育の創出に向けて、幼稚園教育の成果を問う試み: 幼稚園の3歳児保育の内容に着目して, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 19, 327-335.

幼児教育と小学校教育の連携カリキュラム編集会議 2012 「幼児教育と小学校教育の連携ガイドブック アプローチカリキュラム事例集」 大分県教育委員会

参考URL

文部科学省 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告書について www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/houkoku/1298925.htm

ベネッセ教育研究開発センター <http://benesse.jp/berd/focus/2-youshou/activity1/index.shtml>

注1) 自尊心

かけがえのない自分を大切に思う心。自分の弱いところやいやなところも含めて、自分を丸ごと肯定する気持ちであり、自分の存在そのものを価値ある者と認める心。そしてその心は人のことも同じように大切に思う気持ちにつながる。

注2) N幼稚園では、5歳児(1年保育児)の募集は行っておらず、園児は少なくとも1年間の園生活を体験している。

注3) 「ちびっこせんせいのしごと」は、主に次の3点。「かたづけのおしらせをする」(片付けの時間が来たら、鈴を鳴らして友達に知らせる)、「かたづけのしあげをする」、「ぐるーぶのともだちに

てがみをくばる」である。生活グループに1人ずつ、1週間交替の輪番制である。4月下旬より、取り入れられた。